乾隆嘉慶間刊『綴白裘』翻刻版の諸相

根ヶ山　徹

乾隆嘉慶開刊『綴白裘』翻刻版の諸相

根ヶ山　徹

一

乾隆二十九年（一七六四）から十一年の年月をかけて完成された『綴白裘』は、玩花主人の手に成る祖本に基づき、錢德蒼が増輯した戯曲選本である。該書が乾隆三十九年（一七七四）に一應の完成を見るまでに、凡そ三次に亙る編輯、改訂が施されていることは、別稿において夙に述べたとおりである。[1] すなわち、先ずは乾隆二十九年から同三十三年（一七六八）の間に、第一次編輯として全五編が上梓された。次いで乾隆三十五年（一七七〇）における既出五編の改訂、及び六編の上梓、翌三十六年（一七七一）の七編、八編の上梓が第二次編輯である。最後に第三次編輯として乾隆三十七年（一七七二）から同三十九年に至る既出の七編、八編の改訂と、九編から十二編までの新たな上梓が行われる。以上によって、錢德蒼による『綴白裘』の編輯、改訂は一應の完成を見るのである。

かくも複雑な經路を辿って編まれた『綴白裘』は、當初は如上の編輯の各段階ともに金閶寶仁堂から梓行されたものであった。ところが、原刻本と同時代の乾隆年間、それに續く嘉慶年間において、管見の及んだ限りにおいても數多くの翻刻版が行われたことが明らかである。度重なる『綴白裘』の翻刻は、俳優、觀客の立場からすれば、該書が上演や觀劇に際する手控えとして必要不可缺の存在であったことを物語るものであり、書肆の立場からすれば、僅か

な補訂を施しただけで容易に利益を擧げることのできる稀有な存在であったことをも意味していよう。

そこで本稿では、乾隆、嘉慶の兩代に行われた翻刻版の詳細について報告すると同時に、原刻の金閶寶仁堂梓行本がどのように襲用され、增訂が施されているのかについて、當時の演劇界の様相をも視野に入れながら明らかにしようとするものである。

二

『綴白裘』の翻刻版の中で最も古いものは、原刻本において第二次編輯として第一次編輯の全五編が全面的に改訂され、新たに六編が上梓された乾隆三十五年に武林鴻文堂から梓行された初編から六編までであろう。[2] これは、乾隆四十二年（一七七七）の同書肆による全十二編の校訂重鐫本の初編封面は「乾隆四十二年校訂重鐫／綴白裘新集合編／……武林鴻文堂梓行」に作り、初編から十二編までの總目を置いておきながらも、冒頭の乾隆庚寅（三十五年）季春上浣なる刊記を有する程大衡「新鐫綴白裘合集序」には、「玩月（ママ）〔花〕主人　向に『綴白裘』を集め、錢子德蒼　搜採し復た增輯し、一にして二、二にして三、今は則ち廣まりて六と爲る」[3]とあること、また同書二編の封面上欄には「乾隆三十五年夏鐫」、三編から六編までの封面上欄には「乾隆三十五年春鐫」なる刊記が遺されていることから推測が可能である。

しかも、この武林鴻文堂による初編から六編までの翻刻は、二編以降の封面を書肆名以外は金閶寶仁堂梓行本と全く同様に「時興雅調　〇〇〇〇／綴白裘新集／〇編　武林鴻文堂梓行」に作り、内容についても覆刻本と言い得べきほど金閶寶仁堂梓行本に極めて忠實に翻刻されている。ために、錢德蒼に新たに七編、八編の編輯を企圖させる要因となっ

たのではないか。

すなわち、乾隆三十六年、朱祿建の手に成る『補訂時調崑腔綴白裘七編』の序文には、上場の曲を能く輯録したものとして評價すると同時に、翻刻本の横行についても指摘することから明らかである。

今　君　毎歳『白裘』一冊を輯め、已に六編を成す。其の間　節奏の高下、鬭笋の緩急、脚色の勞逸、誠に深く場上の痛癢を得し者有り。故に一集の出づる毎に、彼の梨園中　奉じて指南と爲さざるは無く、壟斷輩の利を圖りて翻刻するを怪しむ無きなり。……繕本の已に剞劂に付さるるを聞き、聊か數言を誌し以て君の請に應ぜんとす。而も亦た以て世の濫竽せし者の恬んじて恥ぢざるを愧むるなり。(4)

また、同年の『再訂文武合班綴白裘八編』冒頭には、他ならぬ錢德蒼その人であると思われる鏡心居士の「求作白裘序啓」が置かれる。ここには、篇幅が増大するにつれ、既出の全六編が翻刻されて書價が減じ、糊口を凌ぎ得ぬほどの苦境に陥った、と言う。

僕　年來　生計蕭條として、窮愁　益ゝ甚だし。酒酣の際、博く時腔を採り、聊か以て愁魔を驅遣す。偶ゝ梓人に付すに、意はざりき　頗る時宜に合ひ、稍ゝ少しく錙銖を覓め、賴ひに以て口を餬するを得んとは。今　友人の翻刻するところと爲りて、搆へし者稀にして値　頓に減ず。(5)

かくも錢德蒼が心を碎いたにもかかわらず、實際に翻刻本が行われたか、あるいは行われる氣配があったためか、乾隆三十七年に九編、十編が編輯された折から、翌三十八年（一七七三）には第二次編輯の七編、八編を解體して全面的な改訂を施し、更に翌三十九年には八編に輯録されていた梆子腔と汎稱される地方劇、及び高腔の散齣を包攝した『綴白裘梆子腔十一集外編』、崑山腔の散齣のみから成る『補訂時尚崑腔綴白裘十二編』の公刊という第三次編輯が行われるに至るのである。

乾隆三十九年における第三次編輯版の『重訂崑腔綴白裘七編』に附される周家璠の序文には、先行の七編が再び翻刻されることを憂慮して、改訂を施して新たなる七編を編輯したと言う。

曩時　本と六集の後に再び一集を編まんと欲す。坊人の竟に七集を以て余に示すを期せず。因りて竊かに其の回心を有すを得しを快とす。(6)

以上のごとく、錢德蒼は周到な用意に基づいて改編を施したにもかかわらず、乾隆四十二年に至って、先の武林鴻文堂によって七編以降の翻刻が行われるのである。このことは、該書の七編、八編、十編の封面上欄に「乾隆四十二年新鐫」、九編の封面上欄に「乾隆四十二年夏鐫」、十一集外編、十二編の封面上欄に「乾隆四十二年冬鐫」とあることから明らかである。七編から十編までの封面は、「内分〇〇〇〇四冊／綴白裘新集／〇編　武林鴻文堂梓行」に、十一集外編の封面は「内分萬方同慶四冊／綴白裘新集／〇編　武林鴻文堂增輯」に、十二編の封面は「内分千古長春四冊／綴白裘新集／〇編　武林鴻文堂增輯」に作り、初編の封面を前述のごとく「乾隆四十二年校訂重鐫」に作っていることからすれば、同年には乾隆三十五年における第二次編輯の初編から六編までの翻刻版に加えて、第三次編輯において新たに編まれた七編から十二編までが新たに翻刻され、全十二編を匯集して、「校訂重鐫」なる四字を冠して上梓されたものと思われる。

三

武林鴻文堂梓行本は金閶寶仁堂梓行本に忠實な翻刻本であるけれども、これ以降に上梓された『綴白裘』には、翻刻であることを悟られぬための弄策か、あるいは當初より翻刻の意識が稀薄であったためか、必ずしも金閶寶仁堂梓

行本には従わず、少なからぬ手が加えられている。

その嚆矢として掲げることのできるものは、乾隆四十六年（一七八一）の四教堂梓行本である。[7] 該書の初集封面は「内分十二集／重訂綴白裘／全編　四教堂梓行」に、二集から十二集までの封面は「重訂綴白裘／〇編　四教堂梓行」に作り、上欄は全て「乾隆四十六年新鐫」と刻されている。

四教堂梓行本と原刻の金閶寶仁堂梓行本、その翻刻である武林鴻文堂梓行本との最も顕著な異同は、各編四集から成るという構成を、各集四卷に改めたことである。すなわち、金閶寶仁堂梓行本においては、初編を「風・調・雨・順」、二編を「海・宴・河・澄」、三編を「祥・麟・獻・瑞」、四編を「彩・鳳・和・鳴」、五編を「清・歌・妙・舞」、六編を「共・樂・昇・平」、七編を「民・安・物・阜」、八編を「五・穀・豐・登」、九編を「含・哺・擊・壤」、十編を「遍・地・歡・聲」、十一集外編を「萬・方・同・慶」、十二編を「千・古・長・春」の各四集に分かっていた。ところが四教堂梓行本ではこうした煩瑣な分類ではなく、初集から十二集に至る各集を、單に「卷一・卷二・卷三・卷四」に簡略化しているのである。

また版心の表記についても變更が見られる。先ず、金閶寶仁堂梓行本では戯曲名、散齣名、集名の順に記載され、例えば「牧羊記　慶壽　風」のごとき形をとる。一方、四教堂梓行本では戯曲名、卷數、散齣名、集名の順に記載され、例えば「牧羊記　卷一　慶壽　初集」のごとき形に作っている。

輯録される散齣に關しても、先ず崑山腔については、金閶寶仁堂梓行本において八十六種四百二十六齣輯録されていたものが、四教堂梓行本に至って八十六種四百二十二齣に改められている。すなわち、初編順集の『水滸記』「殺惜」「活捉」が二集三卷に、二編河集の『倒精忠』「刺字」が六集二卷に、六編樂集の『盤陀山』「燒香」「羅夢」が五集三卷に移され、二編河集の『倒精忠』「草地」「敗金」「獻金橋」、五編妙集の『清忠譜』「訪文」「罵祠」が删去され、

新たに初集四卷に『紅梨記』「賞燈」が增入されている。また崑山腔以外の地方劇や時調小曲など三十四種七十齣について輯錄數に變更は無いものの、金閶寶仁堂梓行本において目錄に「梆子腔」、「高腔」、版心において「梆子腔」、「高腔」、「西秦腔」、「亂彈腔」と表示されていたものが、梆子腔については全て「雜劇」なる名稱に統一されている。

こうした變改に加えて、該書が單なる翻刻本でないことを明らかにするためか、「綴白裘七集序」は乾隆三十六年版の朱祿建序を襲用しながら、前揭の「壟斷輩」以下の剽竊糾彈に係る箇所は刪去され、「誠に風騷の餘事なり」[8]なる一文に置き換えられている。

四教堂梓行本に倣って「〇集△卷」の形式で行われたものには、乾隆四十六年の集古堂藏板[9]、同四十六・四十七年（一七八一・八二）の共賞齋藏板[10]、同年の嘉慶十五年（一八一〇）の五柳居梓行本[11]、同十八年（一八一三）の王善壁・郭維瑄序刊本[12]などが存する。これらの刊本では四教堂梓行本とは異なり、梆子腔の呼稱は雜劇には改められない。

一方、散齣の增刪は見られるものの、體裁は原刻本の金閶寶仁堂梓行本、その翻刻である武林鴻文堂梓行本を襲い、「〇編△集」の形で行われるものも存する。乾隆四十七年の金閶學耕堂梓行本[13]、乾隆五十二年（一七八七）の嘉興增利堂梓行本[14]、同年の嘉興博雅堂梓行本[15]、嘉慶九年（一八〇四）の武林三雅堂梓行本[16]がそれである。いずれも完本を目睹し得ておらず斷定はできないけれども、金閶寶仁堂梓行本、武林鴻文堂梓行本に少しく變改が加えられている。例えば、嘉興增利堂梓行本では六編樂集の冒頭に置かれた『精忠記』「交印」、『盤陀山』「燒香」「羅夢」は刪去され、新たに『宵光劍』「設計」「誤殺」「報信」が加えられているのである。

因に、上梓された地域について見ると、原刻本の寶仁堂梓行本と同じ系統の學耕堂梓行本は金閶、鴻文堂梓行本、三雅堂梓行本は武林、增利堂梓行本、博雅堂梓行本は嘉興といった江南一帶で上梓されている。四教堂梓行本と同じ系統の集古堂藏板、共賞齋藏板、五柳居梓行本、王善壁・郭維瑄序刊本の上梓された地域は詳らかではないが、やは

り江南で上梓されたものと思われる。

四

『綴白裘』に關して、いま一つ興味深い事柄は、金閶寶仁堂梓行本、武林鴻文堂梓行本、四教堂梓行本のごとく、一書肆による全篇の上梓ではなく、ある書肆によって上梓された全篇に別の書肆名を冠したり、異なる書肆によって上梓されたものの零本を匯集したり、その零本の匯集に新たな書肆名を冠したと思われる版本が存することである。

京都大學文學部藏本は、次のごとく初集の封面、すなわち全篇の封面は集古堂藏板としているけれども、二集以降は全て共賞齋藏板に作っている。因に、東北大學附屬圖書館藏の王善壁・郭維瑄序刊本も程大衡の總序に續けて、「嘉慶十八季歲在昭陽作噩孟冬上澣、同里弟王善壁拜題」なる刊記を有する敍、「嘉慶十八年小陽月上澣、表姪郭維瑄頓首拜題」なる刊記を有する題說、「之衆蕭熒藜庭氏識」と署する凡例が置かれる他は、京都大學文學部藏本に完全に一致する。（編名、封面、封面上欄、版心・内容の順で揭げる。封面上欄について記載の無いものには×を附す。版心と内容については、各編（集）が四集（卷）を通じて同一である場合は纏めて、各編（集）の各集（卷）毎に異なる場合は個別に、前述の寶仁堂梓行本系統の形であれば［寶］、四教堂梓行本系統であれば［四］と記す。以下同樣）

編名	封面	封面上欄	版心・内容
初集	乾隆四十六年新鐫　内分十二集 重訂綴白裘新 集合編　集古堂藏板	×	［四］

二集～九集	乾隆四十六年新鐫 重訂綴白裘 ○集　共賞齋藏板	×	［四］
十　集	乾隆四十七年新鐫 重訂綴白裘 十集　共賞齋藏板	×	［四］
十一集～十二集	乾隆四十六年新鐫 重訂綴白裘 ○集　共賞齋／藏板	×	［四］

また、北京大學圖書館古籍善本室藏本には、次のような體裁から成るものが存する。すなわち、初集から三集までは四教堂梓行本が用いられているけれども、封面を四教堂梓行に作る四集の鳳集・和集には寶仁堂梓行本系統の零本が用いられ、五編以降は嘉興增利堂梓行本が用いられているのである。四編までは四教堂梓行本に生じた一部の缺落を寶仁堂梓行本系統の零本によって、五編以降は增利堂梓行本によって補ったものである。

編　名	封　面	封面上欄	版心・内容
初　集	内分十二集 重訂綴白裘 全編　四教堂梓行	乾隆四十六年新鐫	［四］

編名	封面	封面上欄	版心・内容
二集～三集	重訂綴白裘新集 ○編　四教堂梓行	乾隆四十六年新鐫	［四］
四　集	重訂綴白裘新集 四編　四教堂梓行	乾隆四十六年新鐫	卷一［四］ 鳳集［寶］ 和集［寶］ 卷四［四］
五編～十二編	内分〇〇〇〇四册 綴白裘新集 〇編　嘉興增利堂梓行	乾隆丁未年夏鐫	［寶］

同じく北京大學圖書館古籍善本室藏本には、複數の書肆によって上梓されたものの零本を匯集し、全篇の封面に新たな書肆名を冠したものも存する。すなわち、全篇の封面を桂月樓梓行に作りながら、初集、及び封面を缺く四編には、寶仁堂梓行本系統と四教堂梓行本系統の零本が混在し、封面を金閶寶仁堂梓行に作る三編の卷二、卷四は、四教堂梓行本系統の零本が用いられている。また二編、六編、十編は書肆名を缺くけれども寶仁堂梓行本系統の版本が、五編には嘉興增利堂梓行本が、七編、九編には金閶學耕堂梓行本が、八編には武林三雅堂梓行本が、十一編には嘉興博雅堂梓行本が、十二編には金閶寶仁堂梓行本が用いられている。尚、二編の澄集には「此集缺」なる注記が墨書されているけれども、寶仁堂梓行本系統の八編登集が補われている。以上の詳細は次のとおりである。

初集	内分十二集 重訂綴白裘 全編　桂月樓梓行	×	卷一　[四] 卷二　[四] 雨集　[寶] 順集　[寶]
二編	内分海宴河澄四冊 綴白裘新集 二編	×	海集　[寶] 宴集　[寶] 河集　[寶] 缺
三編	内分祥麟獻瑞四冊 綴白裘新集 三編　金閶學耕堂梓行	乾隆三十五年春鐫	祥集　[寶] 卷二　[四] 獻集　[寶] 卷四　[四]
四編	缺	缺	卷一　[四] 鳳集　[寶] 卷三　[四] 卷四　[四]
五編	内分清歌妙舞四冊 綴白裘新集 五編　嘉興增利堂梓行	乾隆丁未年夏鐫	[寶]

六編	□□□□□平四冊 □白裘新集 六編	×	〔寶〕
七編	內分民安物阜四冊 綴白裘新集 七編　金閶學耕堂梓行	乾隆四十七年夏鐫	〔寶〕
八編	內分五穀豐登四冊 綴白裘新集 八編　武林三雅堂梓行	嘉慶甲子年春鐫	〔寶〕
九編	內分含哺擊壤四冊 綴白裘新集 九編　金閶學耕堂梓行	乾隆四十七年夏鐫	〔寶〕
十編	缺	缺	〔寶〕
十一編	內分萬方同慶四冊 綴白裘外編 十一集　嘉興博雅堂梓行	乾隆丁未年夏鐫	〔寶〕
十二編	內分千古長春四冊 綴白裘補編 十二集　寶仁堂增輯	乾隆三十九年夏鐫	〔寶〕

以上のごとく、實際に巷閒に行われた『綴白裘』の中に、異なる書肆によって梓行されたものの零本を匯集し、完本としたものが存することは極めて特徴的なことと言わざるを得ない。全篇の封面を集古齋藏板に作りながら内實は共賞齋藏板の版本を用いるものは、あるいは版權の移讓等の事情によるものであろう。ところが、四教堂梓行本を標榜しながら、四教堂梓行本系統の版本のみならず寶仁堂梓行本系統の零本、增利堂梓行本が一套として纏められているもの、あるいは桂月樓梓行と明示しながら、寶仁堂梓行本系統、四教堂梓行本系統の零本、及び增利堂梓行本、學耕堂梓行本、三雅堂梓行本、博雅堂梓行本[17]を纏め直したものは、零本の匯集によって完本に擬したものであることが明らかである。これらも當初は恐らく一書肆によって全編が上梓されたものであろうけれども、時代の推移に伴って一部分に缺落が生じたがため、已む無く如上の措置がとられたのではないか。これが譬え藏書家の手に成る策術であったにせよ、十二編が一套として行われることに『綴白裘』の存在價値が認められていたことを物語っているであろう。

五

『綴白裘』における散齣の輯錄において、看過できないのは崑山腔以外の地方劇の蒐集である。これは、當時、巷閒で繰り廣げられていた雅部、すなわち傳統的な崑山腔の戲曲と、花部、すなわち新興の聲腔に乘せた地方劇との交替に影響されての事と考えられる。

乾隆三十五年版の『綴白裘』六編凡例には、俗に梆子腔と汎稱される聲腔が、梆子秧腔と梆子亂彈腔の二種を意味しており、前者を梆子腔、後者を亂彈腔と呼ぶ、と定義されている。

梆子秧腔は、卽ち崑弋腔なり。梆子亂彈腔と俗に皆な梆子腔と稱す。是の編中　凡そ梆子秧腔は則ち梆子腔と簡

稱し、梆子亂彈腔は則ち亂彈腔と簡稱し、以て混淆を防ぐ。[18]

孟繁樹氏によれば、崑弋腔が安慶に流入し、秦腔との融合に際して、崑弋腔を主體とする梆子秧腔と、秦腔を主體とする梆子亂彈腔に分化したもののごとくである。[19] すなわち、崑山腔と弋陽腔系統の聲腔とが融合して生み出された崑弋腔が、秦腔の影響を受けて新たな聲腔へと變容したのである。崑山腔は言うまでもなく長短句から成る曲牌聯套體の形式をとる樂曲系演劇である。弋陽腔系統の聲腔とは、基本的には樂曲系演劇ながらも齊言句から成る詩讃體の滾調を含んだ板式變化體形式の詩讃系演劇であり、萬曆年間以降、皖南において盛行した青陽腔や徽州腔を指す。また秦腔は恐らく山陝商人によって齎された山西・陝西の詩讃系土腔であり、この秦腔と崑弋腔との融合によって生み出された梆子秧腔、梆子亂彈腔なる新たな聲腔は、いずれも板式變化體の色彩が濃厚である。

別稿において指摘したように、『綴白裘』に輯錄される梆子秧腔、梆子亂彈腔は、いずれも長短句から成る曲牌を含みつつ、齊言體の部分をも併せもつという形態であることから、曲牌聯套體から板式變化體への、まさしく過渡的段階に位置するものと認められる。[20]

これら『綴白裘』の散齣は、まさしく乾隆年間において一般に行われていたものであり、こうした新興の聲腔に基づく散齣の輯錄は、當時の演劇界からすれば時宜に適った快擧であったろうし、事實、明末以來隆盛を誇った崑山腔が忌避されて、新興の聲腔が歡迎される傾向にあったごとくである。例えば、庚午（乾隆十五年・一七五〇）に公刊されたと覺しい、江寧出身の張堅『夢中緣』冒頭に附される徐孝常の序文には次のごとく言う。

好む所は惟だ秦聲・囉・弋のみにして、吳騷を聽くを厭ひ、崑曲を歌ふを聞けば、輒ち鬨然として散去す。[21]

また金匱の人である錢泳の『履園叢話』十一「藝能」の「演戲」の條にも同樣の見解が見られる。道光十八年（一八三八）の上梓ではあるけれども、乾隆年間の樣相が活寫されているものと思われる。

近ごろは則ち然らず、『金釵』『琵琶』諸本を視て老戯と爲し、亂彈・灘王・小調を以て新腔と爲す。多く小旦を搭ひ、雜ふるに插科を以てし、多く行頭を置き、再び面具を添へて、方めて新奇を稱すれども、而れども觀る者益ゝ衆し。如し老戯の一たび上場さるれば、人人星散す。豈に風氣の然らしむるや。(22)

觀客の社會的階層の差異も考慮すべきではあろうけれども、かくのごとき趨勢にあって、新興の聲腔を輯錄したことが、『綴白裘』盛行の要因の一つになったものと考えられる。

次の各書は乾隆、もしくは續く嘉慶年間に上梓された曲譜、あるいは演目の記錄である。これらの記錄に『綴白裘』所收の新興の地方劇三十四種七十齣を徵すると、『綴白裘』が巷間における上演を多數輯めていることが明らかである。(〔　〕は略稱)

・安樂山樵『燕蘭小譜』卷之二・三「花部」、乾隆五十年(一七八五)　〔燕〕
・葉堂『納書楹曲譜』外集卷二・補遺卷四、乾隆五十九年(一七九四)　〔納〕
・李斗『揚州畫舫錄』卷五「新城北錄下」、乾隆六十年(一七九五)　〔揚〕
・小鐵笛道人『日下看花記』、嘉慶八年(一八〇三)　〔日〕
・衆香主人『衆香國』、嘉慶十一年(一八〇六)　〔衆〕
・焦循『花部農譚』、嘉慶二十四年(一八一九)　〔花〕

『綴白裘』(散齣名・聲腔)		燕	納	揚	日	衆	花
小妹子(思春)	-3祥	○	○			○	
買胭脂(梆子腔)	-6共	○			○	○	
花鼓(梆子腔)	-6共	○	○	○	○	○	

これらに共通して輯錄、著錄される演目を拾い集めると、以下のごとく二十齣を見出すことができる。(他書にも同一の散齣が輯錄、著錄される『綴白裘』の散齣のみを掲げ、散齣名〈聲腔名もしくは作品名〉と輯錄編數も

思凡（孽海記）	6樂	○	○	○	○	○										
送昭（青塚記）	6昇		○		○											
相罵（梆子腔）	6昇				○	○										
過關（梆子腔）	6平					○										
連相（梆子腔）	11萬				○											
看燈（梆子腔）	11方	○														
趕子（清風亭）	11方															
請師（梆子腔）	11方															
擂擡（如意鈎）	11方	○														
戲鳳（梆子腔）	11同															
算命（何文秀）	11同															
別妻（梆子腔）	11同	○			○											
上坟（蜈蚣嶺）	11同	○			○											
借靴（高腔）	11同		○													
磨房（梆子腔）	11慶				○											
串戲（梆子腔）	11慶				○											
打麵缸（梆子腔）	11慶					○										

併記する。○は他書において同一の散齣が輯錄、著錄されているものに附す）

『綴白裘』は、乾隆壬辰（三十七年）中秋月の刊記をもつ桐鄉朱鴻鈞の「綴白裘十集序」に「古吳錢子沛思」と明記されていること、また當初は「金閶寶仁堂」から梓行されたものであることから、專ら蘇州一帶で行われた演劇のみを輯錄したもののごとくに思われがちである。ところが、乾隆癸未（二十八年・一七六三）孟春の刊記を有する許永昌の「綴白裘八集序」によれば、錢德蒼は河北、山西、山東、湖北の各地を遨遊し、音曲に深い造詣を有していたがゆえに、各地の演劇についての知見をも廣めたごとくである。

錢君沛思、髫年英俊、屢ゝ場屋に蹶く。然れども豪放不羈、性　音律を好み、常に燕・趙・齊・楚を遨遊し、諸王公貴人、其の才を羨まざるは莫く、羅ねて之を幕下に致さんことを願ふも、錢君　屑しとせざるなり。唯だ酒旗歌扇の場に跌宕し、歲ごとに『綴白裘』一冊を輯め、自歌自咏、醉ゑる

が若く狂へるが若く、凡そ七たび刻せり。[23]

こうしたことから、南方での記録をとどめる『揚州畫舫錄』や『花部農譚』はもとより、北京での見聞に基づく『燕蘭小譜』、『日下看花記』、『衆香國』のみに記録される演目も、『綴白裘』に輯録されているものと思われる。

尚、地方劇を輯録する十一集外編は、恐らく翻刻に攜わった者に演劇に對する見識が乏しかったためか、聲腔の呼稱以外の部分には、乾隆三十九年の編輯當初から手が加えられていない。

六

では、當時の演劇界において『綴白裘』の存在は如何なる意味を持つものであったのか。

錢德蒼の手に成った當初の『綴白裘』は、俳優の指南書としての價値を有していたもののごとくである。第三者の手によって記された序文の言説は、例え褒辭であるにせよ、該書の實情を能く言明したものである。先に掲げた第二次編輯の『補訂時調崑腔綴白裘七編』の朱祿建序に、「故に一集の出づる毎に、彼の梨園中　奉じて指南と爲さざるは無く、……」と言う他にも、同じく第二次編輯の『校訂時調崑腔綴白裘四編』冒頭に附される、「丙戌（乾隆三十一年・一七六六）仲秋、青浦陸伯焜書」なる刊記を有する「綴白裘四集序」には次のように言う。

錢子　復た『綴白裘』四集を輯め、新聲逸調、特だに梨園樂部の奉じて指南と爲すのみならず、抑ゝ亦た鼓吹休明にして、風俗の一端を激揚するなり。[24]

また、第三次編輯の『重訂崑腔綴白裘七編』に附される「乾隆甲午（三十九年）嘉平、耕雲山人周家璠書於武林之臨江艸堂」なる刊記を有する序文には次のように言う。

『綴白裘』の作や、蓋し演劇の緩急を調ふる所以は、梨園子弟の爲に其の勞逸の宜しきを均ふるのみ。余　素より宮商を諳んぜず、是の編の詞義を翫ぶに因りて、文質或勝の弊無く、殊に詞曲の時中爲る可く、優伶輩　皆な奉じて以て歸と爲す可き者なり。[25]

上梓された當初は俳優が遵用するに足り得たとしても、舊來の崑山腔に取って代わり新興の聲腔が目覺ましい發展を遂げた當時にあっては、時代の經過につれて實際の上演にそぐわぬものになっていったであろうことは想像に難くない。このことは、乾隆四十六年の四教堂梓行本における散齣の移動と新增、乾隆五十二年の嘉興增利堂梓行本における散齣の加刪、また四教堂梓行本において梆子腔を全て雜劇と改稱したり、全編の封面に桂月樓梓行とある匯集本の六編、及び嘉興博雅堂梓行本の十一集外編では梆子腔の一部を崑弋腔と稱するがごとき、崑山腔以外の地方劇の呼稱の變更からも明らかである。

事實、徐珂『清稗類鈔』「戲劇類」の「崑曲戲」には、嘉慶・道光年間にあって、宴席での演劇上演においては、俳優は射利に腐心するのみで、新聲新曲の紹介は等閑視したこと、その要因として、彼らが遵奉した『綴白裘』が乾隆の上梓であったためであるとする。

嘉（慶）・道（光）の際、海内の宴安、士紳の讌會は、音あるに非ざれば樽せず。而して郡邑城鄉、歲時祭賽も亦た劇有らざるは無し。用ゐしこと日ゝ以て多く、故に調べは日ゝ以て下る。伶人　苟も射利を圖りて、但だ竊似することのみを求めて、已に場を充たすに足れり。故に從て新聲新曲の其の間に出づるは無し。『綴白裘』の集は、猶ほ乾隆の時本なればなり。[26]

以後、巷閒において行われた戲曲の散齣を輯錄する選本としては、乾隆五十九年の葉堂『納書楹曲譜』を除くと、同治九年（一八七〇）の遏雲閣主人の序を有し、上海著易堂書局印行の『遏雲閣曲譜』の登場を待たねばならない。

王錫純輯、李秀雲拍正に係る該書は、工尺譜を附す曲譜であり、しかも崑山腔の散齣のみが輯録されたものではあるけれども、先行の『綴白裘』を強く意識して上梓されたものである。上梓の經緯については序文に次のように言うごとくである。

余　性　傳奇を好む。其の悲歡離合、曲に人情を繪くことの、閱歷に勝るを喜べばなり。而るに其の善本無きを惜しむ。『納書楹』の舊本有りと雖も、要は皆な『九宮』もて譜を正す。後に『綴白裘』出づるや、白文俱に全く、歌を善くする者　羣奉して指南と爲す。奈んせん相ひ沿ひて今に至り、梨園演習の戲、又た多く合はず。家に二三の伶人有り、其れをして『納書楹』『綴白裘』の中に細かに校正を加へ、清宮を變じて戲宮と爲し、繁白を删りて簡白と爲し、旁に工尺を註し、外には板眼を加へ、投ぜし時に合ふに務めしめんことを命じ、以て同調に公にす。事　游戲に涉り、未だ敢へて諸を大雅に質さず。然るに花晨月夕、檀板清謳、未だ始めて怡情の一助に非ずんばあらざるなり。[27]

ともあれ、『綴白裘』は坊刻本でありながら夥多の書肆によって翻刻され、今日に傳えられている。翻刻の過程において、若干の補訂が施され、二系統に分化するものの、適切な補訂を加え得る人物が現われなかったためか、原刻本の面目は概ね保たれ續けるのである。先にも述べたとおり、再三に亙る翻刻版の梓行は、實際の上演に卽した内容をとどめていることから、當時の江南演劇界、なかでも俳優達にとって極めて有用な書物であったことを意味しており、ために多くの需要に應えるための暇がなかったことは明らかであろう。とりわけ、舊來の崑山腔だけではなく、新興の聲腔をも輯録していることから、博く俳優、觀客、讀者に歡迎されたことは想像に難くない。すなわち、『綴白裘』の上梓と、その度重なる翻刻は、當時の演劇の様相、とりわけ新舊聲腔の交替を如實に表徵しているのである。

注

（1）「乾隆三十六年版『綴白裘』七編、八編の上梓とその改訂」（『東方學』第九十八輯、一九九九）。

（2）國立公文書館内閣文庫藏本。

（3）原文は「玩月主人向集『綴白裘』、錢子德蒼搜採復增輯、一而二、二而三、今則廣爲六」。因に、乾隆三十五・三十六年における第二次編輯版の同序には「今則廣爲八」とある。

（4）原文は「今君每歲輯『白裘』一册、已成六編。其開節奏高下、鬬笋緩急、脚色勞逸、誠有深得乎場上之痛癢者。故每一集出、彼梨園中無不奉爲指南、無怪壟斷輩之圖利翻刻也。……聞繕本已付剞劂、聊誌數言以應君請。而亦以愧世之濫竽者之恬不知恥也」。

（5）原文は「僕年來生計蕭條、窮愁益甚。酒酣之際、博採時腔、聊以驅遣愁魔。偶付梓人、不意頗合時宜、稍得少覓錙銖、賴以餬口。今爲友人翻刻、搆者稀而値頓減」。

（6）原文は「曩時本欲於六集後、再編一集。不期坊人竟以七集示余、因竊快其得有回心」。

（7）九州大學附屬圖書館六本松分館濱文庫藏本。

（8）すなわち「故每一集出、梨園中無不奉爲指南、誠風騷之餘事也」に作る。

（9）京都大學文學部藏本。

（10）京都大學文學部藏本。

（11）京都大學人文科學研究所藏本。

（12）東北大學附屬圖書館藏本。

（13）北京大學圖書館古籍善本室藏本（書號　口／812.08／8324.6）に匯集される零本の一。

（14）前掲注(13)、及び北京大學圖書館古籍善本室藏本（書號　口／812.08／8324.7）に匯集される零本の一。

（15）前掲注(13)に同じ。

（16）前掲注(13)に同じ。

（17）ソウル大學校附屬圖書館には、全十二編ともに嘉興博雅堂梓行本から成る版本を藏する。

（18）孟繁樹氏『中國板式變化體戲曲研究』（文津出版社、一九九一）一六二頁引用の原文は「梆子秧腔、卽崑弋腔、與梆子亂彈

腔俗皆稱梆子腔。是編中凡梆子秧腔則簡稱梆子腔、梆子亂彈腔則簡稱亂彈腔、以防混淆」。

(19) 前揭注(18)孟繁樹氏論文一六八頁。

(20) 前揭注(1)。

(21) 原文は「所好惟秦聲・囉・弋、厭聽吳騷、聞歌崑曲、輒閔然散去」。

(22) 原文は「近則不然、視『金釵』『琵琶』諸本爲老戲、以亂彈・灘王・小調爲新腔。多搭小旦、雜以插科、多置行頭、再添面具、方稱新奇、而觀者益衆。如老戲一上場、人人星散矣。豈風氣使然耶」。

(23) 原文は「錢君沛思、髫年英俊、屢蹶場屋、然豪放不羈、性好音律、常遨遊於燕・趙・齊・楚、諸王公貴人、莫不羨其才、願羅而致之幕下、錢君不屑也。唯跌宕於酒旗歌扇之場、歲輯『綴白裘』一册、自歌自分咏、若醉若狂、凡七刻矣」。

(24) 原文は「錢子復輯『綴白裘』四集、新聲逸調、不特梨園樂部奉爲指南、抑亦鼓吹休明、激揚風俗之一端也」。

(25) 原文は「『綴白裘』之作也、蓋所以調演劇之緩急、爲梨園子弟均其勞逸之宜耳。余素不諳於宮商、因翫是編之詞義、無文質或勝之弊、殊可爲詞曲之時中、優伶輩皆可奉以爲歸者也」。

(26) 原文は「嘉・道之際、海内宴安、士紳讌會、非音不樽。而郡邑城鄉、歲時祭賽、亦無不有劇。用日以多、故調日以下、伶人苟圖射利、但求竊似、已足充場。故從無新聲新曲出乎其閒。『綴白裘』之集、猶乾隆時本也」。

(27) 原文は「余性好傳奇。喜其悲歡離合、曲繪人情、勝於閱歷。而惜其無善本焉。雖有『納書楹』舊曲、要皆『九宮』正譜。後『綴白裘』出、白文俱全、善歌者羣奉爲指南。奈相沿至今、梨園演習之戲、又多不合。家有二三伶人、命其於『納書楹』『綴白裘』中細加校正、變清宮爲戲宮、删繁白爲簡白、旁註工尺、外加板眼、務合投時、以公同調。事涉游戲、未敢質諸大雅。然花晨月夕、檀板清謳、未始非怡情之一助也」。